６ 果樹①

種類	作型・品種	目標収量 (kg/10a)	施肥時期・成分施肥量 (成分kg/10a) 施用時期	窒素	リン酸	加里	施肥上の留意点
りんご	ふじ	3,200	基肥	5.0	2.0	4.0	肥沃度中位ほ場の施肥量の目安であり、堆肥2t/10a程度の施用を標準とする。基肥の施用時期は、根が活動している9月下旬～10月上旬を基本とし、積雪前に樹体に吸収貯蔵させ、翌春の初期生育に備える。
			合計	5.0	2.0	4.0	
	つがる	3,000	基肥	7.0	3.0	6.0	
			合計	7.0	3.0	6.0	
ぶどう	露地栽培						発芽期～開花期までの初期生育は貯蔵養分への依存が強いので、基肥は根が十分に活動している前年の9月下旬～10月上旬に施し、樹体内に蓄積させておく。
	巨峰・ﾊﾆｰﾌﾞﾗｯｸ	1,400～1,500	基肥	4.0～6.0	2.0	3.0～5.0	
			合計	4.0～6.0	2.0	3.0～5.0	
	ピオーネ・高尾（大粒種）	1,300～1,500	基肥	8.0～12.0	3.0～5.0	6.0～10.0	
			合計	8.0～12.0	3.0～5.0	6.0～10.0	
	安芸クイーン	1,100	基肥	3.0～5.0	1.0～2.0	2.0～4.0	
			合計	3.0～5.0	1.0～2.0	2.0～4.0	
	デラウェア	1,500	基肥	10.0～15.0	4.0～6.0	8.0～12.0	
			合計	10.0～15.0	4.0～6.0	8.0～12.0	
かき	平核無	2,000	基肥	12.0	5.0	10.0	9月下旬～10月上旬に全量基肥とし、追肥、礼肥は原則として施用しない。かきは、6月～8月に養分吸収の山があり、それが新梢伸長と果実肥大に大きく働いている。しかし、窒素肥効が9月～10月まで連続的に続くと果実の成熟遅延等を招くので、有機物の施用量は、その肥効率に留意し年間施用窒素量の30%相当程度を秋～初冬期に施用すれば、窒素の遅効きを生ずることなく安全である。
			合計	12.0	5.0	10.0	
西洋なし	ラ・フランス	3,500	基肥	12.0	5.0	10.0	基肥は根の同化能力の衰えない前年の9月下旬～10月上旬に施用し、できるだけ根に吸収蓄積させる。有機質主体の肥料を施用する場合は、肥効が現れるまで時間がかかるので、化学肥料より2週間程度早めに施す。
			合計	12.0	5.0	10.0	

6　果樹②

種類	作型・品種	目標収量 (kg/10a)	施肥時期・成分施肥量 (成分kg/10a) 施用時期	窒素	リン酸	加里	施肥上の留意点
日本なし	幸水 豊水	2,500 3,000	基肥 合計	20.0 20.0	8.0 8.0	16.0 16.0	施肥時期は、前年の9月下旬～10月上旬に全量基肥とする。窒素の多用は果実肥大にはあまり効果なく、逆に糖度の低下など品質の低下につながるので、前年の施肥実績と生育・収量・品質等を勘案して決める。
すもも	大石早生 太陽	2,200	基肥 追肥（春） 合計	10.0 4.0 14.0	6.0 2.0 8.0	8.0 4.0 12.0	9～10月に年間の70～80%を施す。春は前年の結果量、花の状態をみて、3～4月に年間の20～30%を施す。特に樹勢が衰えている場合は、収穫直後に速効性肥料を二次伸長を誘発しない範囲で施す。
おうとう	佐藤錦 紅秀峰	600	畑地 基肥 礼肥（7月） 合計	 12.0 3.0 15.0	 5.0 1.0 6.0	 10.0 2.0 12.0	根の活動している9月下旬～10月上旬に基肥を施用し、貯蔵養分を十分に蓄え、翌春の初期生育の充実を図る。この施用量は畑地で年間施用量の80%とする。有機質肥料主体の場合は、肥効を考慮し2～3週間早めに行う。また、収穫してから基肥までの期間が長いので、収穫後年間施用量の20%を礼肥として施用し、消耗した樹体を回復させ、健全な花芽分化を促す。ただし、地力の低い園地では、収穫後と8月上旬の2回施用とする。「紅秀峰」は結実が良好なため、樹勢が衰弱しやすい傾向がある。そのため、礼肥の割合を年間施用量の5割程度とし、速やかな樹体の回復を図る。
			畑地（やせ地） 基肥 礼肥（7月） 礼肥（8月） 合計	 9.0 3.0 3.0 15.0	 4.0 1.0 1.0 6.0	 7.0 2.0 2.0 11.0	
			砂丘地未熟土 基肥 礼肥（7月） 合計	 12.0 8.0 20.0	 5.0 3.0 8.0	 10.0 6.0 16.0	
もも	川中島白桃 あかつき	3,200	全量（年間） 合計	15.0 15.0	6.0 6.0	12.0 12.0	年間施用量の80%を9月下旬～10月上旬に基肥として施用する。また、収穫後に樹勢回復のために礼肥として20%を施用する。ただし、新梢が徒長するような場合には礼肥の施用は行わない。